

「遊び」を身体からだに刻み込む教育

清水 論

一、「遊ぶ子供の声」

遊びをせんとや生れけむ、戯たはぶれせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動ゆるがるれ。（『梁塵秘抄』巻二）

作家の高田宏氏は、このよく知られている歌について、著書『子供誌』の中で次のように述べています。

「この歌を思い出すたび、どきりとする。生の根源にある何かを突きつけられ、一瞬おびやかされるような気がする。：『遊ぶ子供の声』というのは、どんな声だろうか。（四三頁）と。

この「遊ぶ子供の声」は、どうもサッカーのゲームでゴールを目指す味方に対して送る声援とか、野球の練習の時にお互いを叱咤激励するような声ではなさそうです。まして、テレビゲームに熱中している時に漏れ聞こえてくる声でもないようです。

私は一九六〇年、東京に生まれましたが、七〇年代の中頃までは路地裏といわれる空間から「遊ぶ子供の声」が聞かれていたように思えます。かんけり、かくれんぼ、石けり、ゴムとび、羽子板遊び、凧揚げ、メンコ、コマ、酒ぶた遊び、等々。狭い路地ではありましたが、遊んでいる子どもたちみんなが、このなりゆきに集中

し、時に興奮のあまり叫びにも似た声を上げていたのを覚えています。

二、スポーツの構造―「近代」の理念

最近ではこのような「遊び」よりも「スポーツ」に目が向いています。野球、サッカー、水泳、体操、テニスやゴルフなど、幼児の頃から専門のコーチにつき、その技術を身につけるのに、必死のようです。Ｊリーグのチームには、ジュニアからプロまで組織だった育成機関を設けることがその発足の条件としてあります。人気チームの読売クラブのジュニアチームに入るには、かなり高い倍率の厳しい試験をパスしなければなりません。そして、入れたにしてもレベルの高い集団の中で、ふり落とされずに次のステップに上がれるよう練習を繰り返していくわけです。そして、その競争を勝ちえた技術と運に恵まれた一握りの選手がプロとしてさらに厳しい環境下で戦うわけです。

私の少年時代から母親たちに「勉強しなさい。でない

といい学校に行けませんよ。」と言われる子どもが大勢います。東大を頂点とする学歴社会は、日本の社会の中で今も生き続けていることは事実でしょう。この頂点を目指すために幼少時から塾に通い、有名進学校に入学することを目的としているわけです。

そのような勉強の世界と同じことがスポーツの世界でも言えるようになってきました。プロになるために、優秀な指導者がいるといわれるクラブあるいは中学、高校、いやその前に野球ならばリトルリーグ、サッカーならばジュニアチームというように、プロを頂点としたピラミッド・システムの中に入っていくわけです。今やひとつのスポーツ種目に秀でるとスポーツ推薦という名で一流大学に入学でき、そこでなんとか四年間やっていけば、一流企業に入社することも可能なシステムが確立しています。ですから勉強と同じように、スポーツに秀でることは、学歴を獲得し、社会の中であるレベルの地位を得ることにつながっているのです。

ですからなおさら、「教育ママ」といわれるのと同じ

ように子どもがスポーツすることに親は熱心な視線を送るのです。幼児のスポーツクラブは、どこも親が練習場を目を光らせていますし、甲子園に出るくらいの高校ならば「父母の会」がしっかりとあって、日頃の練習から試合まで、父親、母親たちが自分の子どものスポーツする姿をつきつきりで見ている状況が生まれているわけです。

これら貫徹している哲学は、徹底した競争主義、勝利至上主義の精神、いうなれば弱肉強食の考え方です。

そもそも今日みられるようなスポーツは、約百年ほど前にイギリスのパブリックスクールを主たる舞台として作られてきました。そしてそれは、それ以前にあった身体文化と大きく異なった現代の我々の社会を基本的に貫く「近代」の理念が基礎にあったのです。

フットボールを例に出せば、十四世紀に端を発するそれは、宗教的に意味のある祝日に大人たちが「神聖なるボール」を奪い合う「祭り」でした。豚や牛の膀胱を膨らませた楕円球をふたつのチームに分かれた数百人の住

民が奪い合いながら、道路を駆け回り、農地や林を横切り、小川を渡って、決められたゴールに運び込むまで続けられました。非常に乱暴ではありましたが、それぞれの地域の伝統を守り、勝敗よりも人々がボールを追いかけることに熱中し、そのことに意味を見い出す「祭り」だったのです。

それが、産業革命の進行によって農村が解体し、再編成される過程の中で、都市部に人口が集中し、新たに富を得たブルジョアジーが力を持つようになると状況は一変しました。彼らは、自分たちの子弟に世界で活躍するための教育を受けさせようと名門パブリックスクールに子どもを入れ、学校に対して経済的、精神的援助を行うようになったのです。そして、スポーツによって子ども的人格が形成されていくことに多大の期待をし、スポーツを支援したのです。子どもたちの出身地によってばらばらに行われていたルールは統一され、鉄道や電信、電話の発達もあって学校対抗で試合をする機運が生まれてくるわけです。村全体を舞台にしたフットボールという

「祭り」は、学校の校庭での「競技」になっていったのです。さらに、学校対抗から一国のチャンピオンを決める試合が起こり、そこから世界大会へとというように、より大きな大会で勝利することに重きを置いていきました。現在、何億という人々がテレビを通して見つめるオリンピックや世界大会はその究極の姿といえるでしょう。そして、勝利至上主義が徹底し、高度な技術を見せることでカネを取るプロの世界に人々は引き寄せられるわけです。

このような特質をもった「スポーツ」が、もはや幼児の世界に構造的に浸透しています。大人たちが作ってきた「スポーツ」という身体技法の世界に早い時期から子どもたちをどっぷりとつからせてしまうことは、子どもの精神や肉体に多大なストレスをかけていることにはならないでしょうか。また、親が学校のテストの成績と同じ目で、子どものスポーツの成績を見てしまったら、子どもはどこに逃げ場を求めるのでしょうか。

競争主義を身体で体験している「スポーツ派」の子ども



もと、「勉強派」の子どもとが小学校で両極化してしまっているという事実があります。スポーツは身体を使った表現ゆえに、「できる」と「できない」がどんな子どもでも一見してすぐわかってしまう冷徹さをもっています。ですから、競争を体で覚え込んでいる「スポーツ派」は、運動のできない「勉強派」の子どもをここぞとばかりに笑いとはず暴力性を持っているのです。

常に頂点を目指して競争するという「近代」の社会が

生み出した特徴は、勉強でもスポーツの世界でも貫徹しています。もはや、自動車のハンドルの余裕のような「遊び」はなくなっていて、ギスギスした人間関係ばかりが結果として生み出されています。そして、こうした「近代」の理念は、社会を構成する予備軍としての子ども、それも幼児期にまで浸透しているわけです。

こうした状況を、すなわち、近代の理念を変えていくような力はどこにあるのか。それこそ幼稚園であり、幼稚園の先生にあると思います。

三、「児童学」が抱え込んでいたもの

「生の根源」としての「遊ぶ子供の声」を幼児期あるいは、児童期の初期の段階で身体に刻み込ませる作業。これを意図的に行うことを真剣に考えなければならぬでしょう。そして、これらを担当する先生こそ「生を分かち合う」「遊び」という実践の場に、鋭敏な感覚で臨む自覚と自信をもたなければなりません。社会を変える源となるべき先生が、この仕事に胸をはってのぞむことが

必要だと思うのです。

このことを幅広い実践の経験から理論づけした人こそ「児童学」の普及者、高島平三郎です。一九一（明治四四）年発行の著書『教育に応用したる児童研究』には、すでに社会の中に、幼児を一定の規律の下に、様々な教科を学ばせようという風潮があることを苦慮する一説があります。

「幼稚園時代の子供は、…自発活動は盛んであるが、記憶はまだ充分に現われぬ。…もし幼稚園をもって小学校の初歩のごとくに考えて、記憶せしめることを主なる目的としたら、それは非常な間違いであると共に、弊害が多い。…一般の父母に幼稚園の意味がよく分かっておらぬために、幼児をここに入れたら何か習って来るであろう、五十音や『いろは』は小学校にゆく前に書けるようになるであろう、数えることも覚えるであろうというような考えをもっているものが多い。しかるに半年通っても一年通っても何も覚えて来ないというようなことより、父母が保母を非難するに至れば、意思の弱い自信力

の乏しい、剩^{あまつさ}え、幼稚園の原理に関する知識さえ甚だ浅薄である所の保母は、知らず識らずの間に父母の意を迎えて種々のことを教え、或いは行儀というて、幼児に無理な静肅を強いたりするようにもなるのである。」(二一六―二一七頁)(注・現代文には著者が書き改めた)

高島は、百年以上も前から幼児教育の根本的ともいえる問題を憂えていたわけです。それに対して、このように述べています。

「然らば、幼稚園では直接にどういうことを目的として保育すべきであろうか。これ即ち活動の善良なる習慣を得しめることである。勿論、習慣もある意味よりいえば、一種の記憶であるといえるが、この記憶は意識的のものではない。むしろ筋肉の活動そのものの、無意識的器械的に連合されたものであるゆえ、性質が普通の記憶とは大いに違っている。かかる習慣は、子供の生れた時よりでき得る性質のものであるが、この時期に特に形成せられ易いのである。そこで、児童に、毎日一定時に遊戯をさせ、その遊戯中に知らず識らず善き習慣を養わ

せ、良き活動をさせてゆくようにするのが幼稚園の主眼である。」(二一八頁)

高島は、一種の遊戯として、子どもが知らず識らずに自然の衝動から手を動かし足を動かし、それを反復することで筋肉が運動に慣れ、次第に細かい働きをすることができるようになるとして手工(紙折り、縫い取り、切り紙、豆細工)が有効であると考えました。手で持つことや手足を動かして何かをすることが、感覚や意思の働きを発達させるために良いと考えていたからです。

さらに、玩具を重視しました。子どもの発達を細かく区分して、いくつもその名を挙げています。風車、風船、旗、でんでん太鼓、おしゃぶり、人形、まり、ガラガラ、ラッパに始まって、玉乗人形、(背)負い猿、鳥笛、器械の亀の子、器械体操(人形が鉄棒をくるくる回る)、米搗車(車を引くと杵が上下して臼の中に落ちる)、桃太郎、天神様、だるまなど。これらの他にも、動物及び人物画並びに絵本類、動物標本、こま、おはしき、ままごと、ポンプ、舟(木製)、車(竹又は木製)、

積木、組立人形、竹とんぼ、豆鉄砲、けん玉、輪や縄、羽子板及び羽子、絵合わせ、錦絵、千代紙、武者絵など。

「知らず識らず皮膚にいろいろの経験を得て、その感覚が発展するのである。；感覚の練習に止まることなく、一層高い種々の精神作用をも、玩具によりて養うことができる。その中で、智力的情操の基礎たるべき好奇心の如きは、玩具によりて刺激せられることが最も多いのである。」（二六五頁）

と高島が述べていますが、まさに彼は玩具が無意識のうち感覚や智力の基礎となるべき好奇心を養うと考えていたのです。しかもそれらの玩具は木や竹でできたもので、それが皮膚感覚として身体に刻み込まれたわけですし、風や水を利用する玩具や動物に関するものも種々あります。さらに日本の風土を背景としたおとぎ話や民間伝承の話をもとにした人形などもあります。こうした意味で、幼児が玩具で遊ぶことは、日本の自然あるいは宇宙のコスモロジーを玩具を媒介にしながら遊戯として

体験し、それを無意識のうちに身体に刻み込ませるという意味があったと考えられます。

さらに高島は、自然が作り出す光、色、形に注目し、それが「自然美」として子どもにもよい影響を与えるとしましたし、舞踊に至るような「運動美」や歌唱やリズム遊びといった音楽、絵画などの「美意識」も遊戯の本能と同時に子どもの成長に不可欠だと考えました。また、何回も童話を読んで聞かせることで、多くのイメージを喚起し、時に絵に描き、歌を歌い、あるいは実際に身体を動かしてみることで理解や感動を高めるべきと考えました。特に日本の物語の中には海の他、自然に関するものが多く、大地に根ざした生活を想像する起源となるのです。

こうした遊戯は、ゲームの勝敗という結果や記録と関わりなく、自分のかって気ままに身体を動かし、そのプロセスを楽しむ点で、スポーツすなわち「近代」の理念と異なっています。高島のいう玩具が今となっては古いことは確かですが、ここでいいたいのは、自分の身体を

媒介にして日本の自然や宇宙のコスモロジーと無意識のうちに分れ合うことが「生を分かち合い」、「生の根源」にある何かを大切にすることにつながるということだと思います。つまり遊戯は、人間の身体が自然や宇宙としっかり関わって存在しているということを認識させる契機なのです。

ところで、なぜ高島はこのような児童学の理論を確立しえたのでしょうか。

一八六五年に生まれた高島は、家庭の事情により小学校を卒業後、十四歳にして母校である広島県西町上小学の助教師として教壇に立った後、十七歳で沼隈郡神村小学校、須江分校（主任）教諭、その後隣村の小学校に赴任後、二二歳にして広島師範学校教師、二三歳で東京高等師範附属小学校、さらに翌年から学習院初等科に勤務しました。それから約十年後には、長野師範学校に転出し、小学校教員検定委員をしています。その後、三七歳で日本体育会体操学校校長、文部省の体操、遊戯調査委員を歴任、そして、東洋大学、立正大学、独協大学、日

本女子大学の教授になりました。

高島にとって、約六十年間もの教育実践こそが宝であり、実際の場で子どもと生活していくことに重きを置いたのです。しかし、学校だけがすべてとも考えなかったのではないのでしょうか。沼隈郡神村須江分校の卒業生たちは、高島の影響で日本で最初の青年団を組織しましたし、高島によってボーイスカウト日本連盟も生まれています。東京で自分の地位を高めることよりも、それぞれ場で子どもたちとの対話、実践を重んじ、そこから理論が湧き出てきたのだと思います。

児童学が確立してきたコンテクストには、このような歴史がまぎれもなく存在していたわけで、その意味で実践の身体感覚を研ぎ澄ますことが、児童学の屋台骨ともいえる教師の役割といえるでしょう。

幼稚園の先生こそが、自然や大地に根ざした遊戯の感覚に敏感になりながら、子どもと「生の本質」を分かち合い、そのことで社会や学校、スポーツを貫徹する理念にしなやかに挑んでいたのだと思います。

〈参考〉

高島平三郎の人的ネットワークは、非常に興味深いものがあります。高島本人は、I O C委員であり、日本がオリンピックに参加する際多大の力を持った嘉納治五郎の塾生でした。その長男である文雄は、もうひとりのI O C委員岸清一法律事務所勤めていて、岸の秘書としてI O Cの会議やオリンピックに行き、大日本体育協会の主事としておりました。また、文雄は、青春や若者らしさを言論活動の中で強調した徳富蘇峰夫妻の媒酌で結婚しています。

また、高島平三郎は三島通陽ふらばと共にボーイスカウト日本連盟を組織しましたが、通陽の叔父は三島彌彦（明治時代、警視総監だった三島通庸の三男）。彼は日本が最初にオリンピックに出場した時（一九一三）の選手のうちひとりでしたし、早大運動部選手O Bや冒険小説家押川春浪らがいる「天狗倶楽部」員でありました。「天狗倶楽部」は、明治期の野生味あふれる男たちのスポーツをはじめとした交流の場でしたし、最初のオリンピック大会の子選会開催に深く関わっています。

こうした高島を中心としたネットワークは、日本のスポーツ（特にオリンピック）の組織や観念がどのような人たちによって作られてきたのか、すなわち近代日本におけるスポーツの精神史を語る上で不可欠なものと思います。

高島平三郎について大きな示唆を与えてくれたのは、文化人類学者山口昌男氏です。氏の明治・大正・昭和における近代日本の精神史についての論稿は、数年前から岩波書店『へるめす』に掲載されています。また、文化のコンテクストの中で、実際に「遊び」を体現する試みとして、福島県昭和村の木造校舎を利用した「喰丸文化再学習センター」が九二年よりオープンしています。

末筆ながら、先生に感謝いたします。

（筑波大学講師・スポーツ社会学）